1943.12.5

東亞物產史

井坂錦一江

東亞物產史

江苏工业学院图书馆
藏书章

井坂錦江

昭和十八年七月十五日初版印刷
昭和十八年七月二十日初版發行（一五〇〇部）

（檢閱濟 411030 版會衆）

★東選書（三）

東亜物産史

㊟ 定價 四圓八十錢

著者 井坂錦江
東京市芝區芝公園七號地十番

發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝浦二丁目三

印刷者 長尾文雄
（東東一二三）
東京市神田區淡路町二丁目九

配給元 日本出版配給株式會社
東京市芝區芝公園七號地十番

發行所 大東出版社
振替東京 一九四七一
電話芝 三九四四
會員番號 一一六五三六

序

東亞物產志を手がけながら想ひ起すことは、明治の末期數年間滿鐵會社に奉職して、專ら現地の經濟調査に從事して居た時のことである。丁度其頃東三省でも各縣に命じて縣下の物資の統計表を作らせて居つたので、これこそ渡りに舟と許り、官衙に往つては「トンチ、ピャオ」を見せてくれとせがんで歩いた。餘り價値あるものもなかつたが、それでも相當參考にはなつた。或る冬、新たに開墾された嫩江左岸の舊蒙古地帶の踏査にいつた時のこと、第二松花江に濱した新開部落の小さい役所を訪ねて、例の要求をすると、始めは未だ調査中だとか何とか斷つて居つたが、こちらはよく何處でも其手を喰つてゐるので、原稿でもいゝからと頑張つたら、澁々ながら持ち出して見せてくれた。この統計表は一定の型式を與へられてゐるので、先づ農產物から始まつて、大豆が何千石高粱が何萬石とかなり大ざつぱの數字が並べてあるのを、根氣よく一々書き寫して行くと、やがて禽獸の部に來ると、數字はいつか消え失せて、備考的のものがこれに替つて居つた。今でも記憶に殘つてゐるのは、鴨の欄であつたと思ふが、こんな意味の文句があつた。

「此鳥は日夜中空を飛翔して、南往北來するもの無數、これを算へんに由なし」

これは家鴨アヒルを題目としたものであるのを、この滿洲產れの朴訥な御役人は野鴨カモと間違へたのであることは、今までの經驗からすぐ諒解されたが、しかし實際此地方のみならず滿洲にはアヒルの飼養は甚だ稀であつた。この統計型式の起案者は新らしき學問を修めた、當世風の役人であつたらうが、滿洲の實情を無視してかゝつたところに無理があつた。私は歸社後、或る機會に部長の岡松參太郎博士に、此話をしたら、氏は微笑しつゝ

「いやそれでいゝ、統計ほどアテにならぬものはないから」

と云はれた。これを反問するには、あまりに大家であるので、無言の内に引き下つた。唯だしかし私は今までの調査が餘り數字にこだはり過ぎて、實質本體を捉へることを閑却して居なかつたかと思ひ當つた。それで私自身で調査の方針を少しく替へていつた、資財から物產へと。

大正の初期である、私は中日實業會社社員として北京に常住し、專ら鑛業方面の企業に與つて居つた。或時北京の近郊齋堂の炭田地方に出かけた、其途次或る村落のやゝ奇麗な農家に一夜を宿ることゝなり、そこの中庭に入つてゆくと、我々の子供の頃に、よく用ひられた附木が蓆に乾してあつた。山西省の奥地で其頃でも燧金の製造をしてゐるのを看たのであるから、敢て不思議がるには當らぬのであるが、附木の發火劑である硫黄が此地方から出るとは聞かぬから、異樣に思はれたの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

である。そこで「これは何にするのか」と、出迎へた老爺に訊ねると、「これは喰べるのだ」と答へたのには、正しく一驚を喫した。

そしてこれは楡(はるにれ)の甘皮で、これをよく乾燥して碎磨して粉にしてから、雜穀と交ぜて煑食するので、楡麵といふのだと說明されて、支那人の利用厚生の進步に舌を卷いたのであつた。

實際支那の物產文獻である本草書には、物產の種類・形狀及び用途に就て、驚くほど細密な記述はあるが、數量に關するものは見當らぬ、數量は時と處を異にして變轉自在である。從來の物產調査が餘りに多く、これに重點を置き過ぎたかの感がないでもない。それは貿易に依つて國交が結ばれた時代には當然であるが、今日大東亞共存共榮の大理想の下には、圈內に於けるあらゆる事物に對してもつと深く堀下げて觀察研究することが緊要であらう。これが私の淺學菲才を顧みず、敢て本著を編んだ趣旨である。

昭和十八年初春

著者識す

東亞物産史　目次

緒言……三
第一章　古代支那の物産誌……七
第二章　上古秦漢時代の物産……一〇
一、「禹貢」の物産……一〇　二、「周禮」職方の物産……一四
三、「史記」貨殖列傳の物産……一五
第三章　訓詁字典と本草第一版……一七
一、「爾雅」の物産資料……一七　二、「神農本草經」の物産……二一
第四章　內外物産の交流……二三
一、古代國外物産の流入……二三　二、「逸周書」の記錄……二三
三、秦漢時代の對外發展……二五　四、三國より南北朝時代……二八
五、「南方草木狀」の物産……四二

第五章　隋唐代の物産……四七
一、南洋物産誌……四七　二、「唐六典」の物産……四八
第六章　日本古代物産誌……五四
一、上代の記錄……五四　二、日本と支那南洋と交流……五八
第七章　宋元代の物産誌と南洋日本との交流……六一
一、「元豐九域志」の物産……六一　二、「開寶本草」其他の物産……六五
三、「諸蕃志」及「島夷志略」の物産……六八　四、「桂海虞衡志」の物産……八〇
五、元の南方經略……八六　六、日本と宋元國との交渉……八七
第八章　明清代の物産と南洋日本との交流……九〇
一、「三才圖會」の物産……九〇　二、「本草綱目」の物産……九四
三、「西洋朝貢典略」「瀛涯勝覽」の物産九七　四、日本と明國との交渉……一〇八
五、本邦人の南方發展……一〇九　六、「本草綱目拾遺」「廣東新語」
七、南方諸國と其物産の變貌……一一三　其他の物産……一一三

第九章　近世日本の物産誌と對外貿易品……一二六
一、「和漢三才圖會」の物産……一二六　二、對外貿易品と「華夷通商考」の商品……一三一
第十章　東亞近代物産の變遷……一三五
一、支那の近代物産……一三五　二、「日清物産略志」の商品……一三六
三、南方物産の變轉……一三七
附錄　一、南洋各地の物産……一四一　二、日本對南洋貿易品……一五〇
別錄　東亞動物志
第一章　家畜類……一五五
馬—牛・水牛—羊・山羊—豚—犬—驢・騾—駱駝
第二章　野獸類……一八三
羚羊—犛牛—鹿類—獅子—虎—豹—熊・羆—貘—豺—山猫—狼—象—犀—兎—猿猴類—麝・香猫・麝鼠—狐—狸—マングース—穴熊—穿山甲—貂—鼬—黄鼠—旱獺—

水獺

第三章　家禽類……二三七

鷄—家鴨—鵝—錦雞—鸚鵡・九官鳥—七面鳥

第四章　野禽類……二三七

雉類—孔雀—鷓鴣—鶴—燕—雀—鶉—鳩—駝鳥・火喰鳥—翡翠—鴛鴦—鷺—伽藍鳥—鵜—杜鵑—雁—鴨—鵠—鶴—鷹—鷲—鳶—金絲燕

第五章　海獸類……二六七

鯨—儒艮—海豚

第六章　魚介類其他……二七一

鱣—鮪—鰻—雷魚—鯖—鰱—鯔—草魚—白條魚—鮒—鯉—鮒—鰻—鱸—鮫—青魚—嘉魚—白魚—香魚—鮫—鱚—河豚—鱭—石首魚—飛魚—鯛—眞珠貝—窓貝—赤貝—寶貝—鮑—牡蠣—カブトガニ—海老—水母—蟹

第七章　爬蟲類兩棲類其他……三〇七
蛇類—龜—鼈—海龜—玳瑁—鰐—蜥蜴—蛙類—山椒魚—蜂—蠍
第八章　傳說上の動物……三三
龍—鳳凰—麒麟

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

東亞物產史

緒言

人類が生存して行くためには物資を必要とする、この人類生活に資する材料こそは今日の所謂物産である。その内で先づ第一に食物が擧げられる。人間は最初に何を食物としたか。

支那の古書には初め人間は果實や魚介を生のまゝ食つて饑餓を充たしたとあるが、それが自然である。それから鳥獸の肉を利用した。これら動物中にはあべこべに人類に危害を與へたものもあるであらうが、頭腦の進化せると四肢の鋭敏が優つてゐる人間が漸次これ等を征服していつた。草本類も早く地上に生じて居つた。それが穀物として利用されるに至つたのは遙かに後れたものと思はれる。衣料も溫寒帶の地方では絶對に必要であつた。これも其始めは獸皮などが主なものであつたが、それが植物纖維や獸毛にと進歩していつた。住居の如きも其始めは穴居や樹上生活であつたのが、段々進化して木材及び土石を利用しての建築となつた。これら衣食住の生活體容の進化過程は傳說なり古文献などから知られるのでもあるが、又今日未開民族の生活がもつとも明白に其實證を示してゐる。そして其中間過程も亦半開民族の生活そのものがこれまた雄辯に物語つてゐる。そしてこれらの生活の向上に比例して、利用される物産の增加してゆくことは言ふまでもないことで、殊に衣食住の直接生活物資が充實され豊滿になつて行くに連れて、その欲望が著しく擴大され、次第に華美となり、奢侈に趨くことは勿論である。さらに精神文化の發達と相俟つて、物資應用の技術能力が日進月歩の勢を以て進歩して止まるところを知らず、斯くて絢爛た

る今日の科學文明の花が咲き開いたのである。

この科學文明も過去に於ける物產に關する智識と經驗とが抑〻の基礎となつてゐる。であるから古代の物產史は人類過去の活きた生活記錄であると共に、將來の進展に對する大なる識示を與へるものである。さらにまた現在湮滅し終つて、全く人類生活と緣かりを失つたかのやうな物資も、決して全然地上からその影を失つたのではない。それが復活され再び人生に貢獻させ得ることも、古物產史に依る導きに期待され得る。

從來我國及び支那大陸の古物產に就ては比較的豐富な資料が殘されてゐる。之に對して人類生活地としての共榮圈の南方部分のものは、其開發は必らずしも晩かつたわけではないのであるが、大陸の文化中心が北方に偏在して居つた上に、その交通が不便であつた爲めに、物資の交流が比較的遲く始まり、從つて文獻の上にも晩く現はれたのであつた。それと南方から將來される物產も所謂異物珍品の類で、土地そのもの〻物產に就ては殆ど研究探査が行はるゝことなく、僅かに特使又は渡來者の見聞記錄に止まるために、其實質の明らかにされて居らぬものが多い。

唯だこゝで極めて興味深い問題は、これら南方將來の異物珍寶の中には、必らずしも南方固有の物產でなく、太古に於ては支那本土に多く存在して居つて、それが南方に轉移していつたものもある。其代表的なものは象及び犀、犛牛の如きで、これらは太古の地質時代にあつては、寧ろ北方の動物であつた。卽ち第三紀から第四紀地質時代にかけて、氷河の形成されるに及んで、これ等が漸次南下したものであるといはれる。さうであるとすれば、古代支那人が此等の產物である象牙・犀角を重用するのは、必らずしも異物珍寶たる許りでなく、彼等の祖先傳來の風俗

であり、又その利用經驗の潛在意識のあらはれであるとも云へる。鳥類では鶴・雁・燕などの所謂渡り鳥が今日の共榮圏の範圍を往來してゐるのも興味深いことである。

植物に至つても、轉移は人爲的ばかりでなく、自然的にも行はれるものである。或る支那學者は、古代に於て北方支那には竹や稻が多く栽植されたのは、その時代に湖沼・水澤が到る處にあつて、これが空中に水分を放散して寒暑氣候を緩和したためで、その後治水の不備から今日の如き乾燥地帶となつたので繁生を見なくなつた、現に山西省の如きは嘗つては濕潤の地であつたのが、今は高地々帶に變じたのが著しい例であると云ふ。この治水の不備の大なる理由としては山林の濫伐を擧ぐべきであらう。中井猛之助博士の「東亞植物」中にこんな興味深い一節がある。

「臺灣は洪積世時代までは、支那大陸と合一してゐたと考へられ、其時代には氣候が寒冷な時期があつて、現在二、三〇〇乃至二、五〇〇米突の位置に生產してゐる松柏類が、當時は低地に盛んに繁茂して支那と共通の植生狀態にあつたのであるが、次第に氣溫が高まるに從つて山上へと上り、其後歐洲に於ける氷河時代の終了後一時乾燥した高溫時代が來つた際、東亞も同樣に氣候が甚しく上昇し、南方系の植物が北方に大移動をなしたもの丶如く、臺灣の平地に熱帶植物が盛んになつて來たのである。其後に於て支那大陸との連絡が臺灣海峽の陷沒によつて斷たれたのであつた。支那の方では、後世界全體の氣溫の低下に遭つて熱帶植物は次第に衰へたのであるけれども、臺灣は臺灣海峽を流れる暖流によつて完全に保護を受けて來た爲め、今尙香港や廣東以南に見る如き熱帶性の植物が安定な成育を續けてゐるのである。」

從來支那の古代物產に就ては比較的資料が豊富であつた。たゞ南方物產に關しては、其交渉が後漢以後に始まり南北朝の頃に至つて漸く南方研究の風潮が盛んになつたため此時代にはそれ相當に名稱が現はれて來てゐるが、唯だその多くは官吏又は渡來者の見聞のまゝを記錄したもので、其實質本體の明らかでないものが少くない。しかしとにかく北方及び西方地方の物產誌ともいふべきものが寥々たるに比して、遙かに品目が多いことは、偶ゝ南方物產の豊饒であることを示すものであり、同時に支那民族が、これらに對しての欲望の旺盛であつたことを物語るものである。これから見ても支那大陸の物資交流は遠古はさて措いて、中世以後に於ては專ら南方との間に行はれたものであり、我國も亦室町時代以後は物資要求の針路は多分に南方に向けて居つたのである。

それから支那では易姓革命に依る盛衰があり、我國では邪教禁制に本づく鎖國などの爲め、對南勢力が一時減退した其機會に、ポルトガル人を先驅とした西力の侵入があり、これら南方物產に對する支配權を、すつかり歐米人の手に掌握せられるに至つたのであつた。

今日東亞新秩序建設の道程にある我國として、その範圍たる大東亞共榮圈內に於けるあらゆる物產に就き、其過去に於ける人類との交渉に關し一わたりの智識を備ふることは、現在並に將來の運營上に必要缺くべからざるものと信ずるに依つて、玆に淺學薄識を顧みず本著に志した所以である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook